

# 第1章 シルクロードについて

## 1、日本に伝わった西域文化

シルクロードについては、まず日本との関係を知らねばならない。そのためには、真っ先に、正倉院にどのような西域文化が残されているかを見ておきたい。「正倉院」がシルクロードの「東の終着点」と呼ばれているからである。



写真は、正倉院に残されている「平螺鈿背八角鏡」という鏡であるが、それは、白や水色のトルコ石、ラピスラズリを散りばめたまことに大変豪華な作品であるが、トルコ石はイラン産、ラピスラズリはアフガニスタン産なのである。

次に、「羊木臈纈屏風（ひつじきろうけちのびょうぶ）」という屏風を見てみよう。



これは、羊がデザインされたろうけつ染めの屏風で、樹木の下に動物の構図は、サーサーン朝ペルシア（3世紀～7世紀）の国教であるゾロアスター教、聖樹禽獣紋から影響を受けていると言われている。

ところで、ニーチェの代表作に「[ツアラトウストラはこう語った](#)」というのがあるが、その作品の中でツアラトウストラとはニーチェ自身のことである。ニーチェはゾロアスター教に憧れていたのである。ゾロアスターとはドイツ語でツアラトウストラという、実は、ゾロアスターとはシヴァの変身である。したがって、ニーチェを理解するには、東方に花開いたシヴァ教のことを知らねばならない。その辺のことは、私の論文「エロスを語ろう・・・プラトンを超えて！」の第3章に詳しく書いたので、それをご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/eros.pdf>

ニーチェは、キリスト教により合理がはびこり、非合理がないがしろにされていると考えた。そこでニーチェは非合理世界の復活を図ったのだ。私は全く正しい認識であったと思う。ニーチェの考える非合理世界の神が「ディオニュソス」である。「ディオニュソス」はもともとインドが源流の「シヴァ」である。長い歴史の中で、「シヴァ」がギリシャで「ディオニュソス」に変身したのである。したがって、「ディオニュソス」＝「シヴァ」と考えてよい。「ディオニュソス」と対立する神が「アポロン」である。その後「アポロン」の神の力が強く働き、ギリシャ哲学は、世界の哲学に発展していくが、ギリシャにおいても原点においては「ディオニュソス」の神の力も強かったのである。だから、ニーチェは、「原点に帰れ！」と言ったのだと言えないこともない。

ギリシャで生まれたプラトンの哲学には、「ディオニュソス」と「アポロン」との矛盾はない。その「ディオニュソス」の源流に「シヴァ」がいる。ということは、シルクロードを通して、東方の文化がギリシャにも齎されていたのである。今私の言いたいことはそのことだ。シルクロードというものは、交易品だけが運ばれたたのではない。文化が運ばれた。当たり前のことだが、それが哲学にまで影響を与えているということは大事な視点である。その辺のことは、私の電子書籍「さまよえるニーチェの亡霊」の第3章に書いたので、先の論文「エロスを語ろう・・・プラトンを超えて！」と合わせて、それも読んでいただければありがたい。

[http://honto.jp/ebook/pd\\_25249963.html](http://honto.jp/ebook/pd_25249963.html)

さて、シルクロードを通して古来から日本にも西域文化が伝来していたという話に戻ろう。実は、正倉院に残されている文化の他に、驚くこと勿れ、弥生時代からシルクロードを通して西域文化が日本に齎されていた。卑弥呼の時代よりもっと古い時代である。

1977年、広島県三次市松ヶ迫矢谷（まつかさこやたに）遺跡から直径約1cmのガラス玉3点が発見された。奈良文化研究所による蛍光エックス線などの分析の結果、ガラス玉の製造に「ナトロン（蒸発塩）」が使われていることが判明した。

古代ローマ帝国のガラス製造にこの「ナトロン（蒸発塩）」が使われていたが、松ヶ迫矢谷遺跡から発掘されたガラス玉は、古代ローマ特有の美しいコバルトブルーの深い色合いのガラス玉であったのである。



cobalt blue

蛍光エックス線などのテクノロジーの進化によって得られたこうした発見は、紀元前弥生時代にすでにシルクロードはローマから日本までつながっていたという動かぬ証拠となっているのである。

以上、日本に伝わった西域文化を残された遺物によって見てきたが、日本に伝わった西域文化の最大のもは何と言っても仏教である。次に、シルクロードと仏教伝来というテーマで話をしたい。

## 2、仏教伝来

京都の西本願寺の向かい、堀川通りに面して、[大谷大学の博物館](#)がある。そこに『仏教の来た道・・・シルクロード探検の旅』という本を売っている。それはこの博物館で開いた特別展の図録であるので、一般の書店には売っていない貴重な本である。

ご承知のように、1902年（明治35年）に西本願寺第22世となる大谷光瑞師（当時25歳）によって組織された探検隊が[大谷探検隊](#)である。大谷探検隊の目的は、仏教伝来のルートを明らかにすることであったが、それはとりもなおさず「シルクロード探検の旅」となった。

**第一次探検：**第1次（1902年 - 1904年）は、ロンドン留学中の光瑞自身が赴き、本多恵隆・井上円弘・渡辺哲信・堀賢雄の4名が同行した。光瑞はカシュガル滞在後インドに向かい、1903年（明治36年）1月14日に、長らく謎の地の山であった[霊鷲山](#)を発見し、また、マガダ国の首都王舎城を特定した。渡辺・堀は分かれてタクラマカン砂漠に入り、ホータン・クチャなどを調査した。

**第二次探検：**第2次（1908年 - 1909年）は、橘瑞超、野村栄三郎の2名が派遣され、外モンゴルからタリム盆地に入り[トルファン](#)を調査した後コルラで二手に分かれた。野村はカシュガル方面、橘はロプノール湖跡のある楼蘭方面を調査した。有名な[李柏文書](#)はこの時に発見されたと見られる。

**第三次探検：**第3次（1910年 - 1914年）は、橘瑞超、吉川小一郎の2名が、トルファン・楼蘭などの既調査地の再調査をはじめ、ジュンガル盆地でも調査を行うほか、敦煌で若干の文書を収集した。

タリム盆地、トルファン、コルラ、カシュガル、楼蘭、敦煌については次の地図(A)、ジュンガル盆地については次の地図(B)を見てその位置を確認願いたい。

楼蘭、美しい響きをもつこの地には古代王国があった。近年の発掘調査から、この地域には4000年の昔から人々の営みがあったことが明らかになってきている。[古代楼蘭にはヨーロッパ系の人々が住んでいたとみられ、出土品からは彼ら独自の文化の一端が浮かび上がってくると言われている。](#)

# 楼蘭 (ローラン)



地図 (B)

これらの地域は、おおむね新疆ウイグル自治区であり、敦煌だけが甘肅省に属している。

インドのガンジス川流域で生まれた仏教は、この地域のオアシス都市、ホータン、クチャ、トルファンに伝わった。ホータンは仏教が隆盛した所としてとりわけ名高い。また、クチャは、西域最大の仏教石窟キジルがあり、華麗な仏教壁画で知られる。「般若経」や「法華経」、「阿弥陀経」を翻訳した鳩摩羅什（くまらじゅう）はクチャ出身である。トルファンは、9世紀頃、トルコ系のウイグル民族が進出してくる。彼らはもともとマニ教であったが、やがて仏教を信奉していく。10世紀後半のトルファンでは、仏教、マニ教、ゾロアスター教、ネストリウス派のキリスト教などが並存していた。多彩な民族が行き交ったシルロードは紛れもなく「宗教の道」であったのである。

したがって、大谷探検隊が明治から大正期にかけてこの天山地域に入ったことの意義はすこぶる大きい。世界的にも高く評価されているが、特に仏教国である日本にとっては、最大級の賛辞を与えてもなお余りあるものがあるだろう。

鳩摩羅什の漢字に翻訳した「法華経」は、智顛の法華経を中心とした天台宗を生み出し、それが最澄に伝わり、やがて日蓮を生み出す。シルクロードがあっはじめて今の日本がある。

では、最後に、遙かなるシルクロード、次の音楽を聴いて思いを馳せてください。

<https://www.youtube.com/watch?v=8w6PwEbhLWY>

